

第2回全日本 学生フォーミュラ大会

を終えて



大会委員長 高原 正雄 ((株)いすゞ中央研究所)

1. はじめに

今年で第2回目を迎えた「全日本 学生フォーミュラ大会」は、8月30日から9月2日の4日間、栃木県茂木町の「ツインリンクもてぎ」で開催されました。昨年の第1回大会(富士スピードウェイ、9月10日～12日の3日間、17チームのエントリー)に対して、エントリーが倍の34チームになったこともあり、会期を1日増やしての大会となりました。

大会2日目の8月31日は、29日から30日にかけて九州に上陸した台風16号が日本海側を北上している日になりました。その余波でツインリンクもてぎは、木々が倒れるなどの暴風状態となり、設置していたテントは吹き飛び、コース設定のパイロンやバリアも至る所に散乱する有様でした。加えて、大会最終日の9月2日は、朝から雨でした。一時は競技続行が絶望的になりましたが、100人以上のスタッフによるコースの雑巾掛けや、自称「関東の晴れ男」・「中部の晴れ男」の念力の効果もあり、何とか最終の耐久競技を実施することが出来ました。そして、どしゃ降りの雨の中での表彰式は忘れられない一齣となりました。大会運営スタッフはじめすべての方たちの献身的なご協力により、第2回大会は何とか成功裏に終了させることが出来ました。ここに、厚く御礼申し上げます。

2. 開催の狙い

すでにご案内のとおりですが、自動車技術会は「全日本 学生フォーミュラ大会—ものづくり・デザイン コンペティション—」を2003年から毎年開催することにしました。この大会は、元々は、SAE International(米国)が1981年より学生向けに行っている「Formula SAE®」をモデルにして企画したものであります。

日本の多くの学生たちが「科学技術好き」になって「ものづくりの大切さ」を体験できるようにしようといった思いから、日本における学生フォーミュラ大会の開催を考えました。目指すところは日本の学生たちがもっと頑張ってもらい、将来、科学技術創造立

国・日本の名に相応しい世界に通用するエンジニアに育てたいということでもあります。2000年頃に企画を開始し、2001年9月の「トライアルイベント(ツインリンクもてぎ)」、2003年9月の「第1回大会(富士スピードウェイ)」を経て、今回の「第2回大会(ツインリンクもてぎ)」となっております。

大会の理念にも掲げてありますが、「ものづくりの機会と活動の場を提供することによって、大学・高専等の工学教育活性化に寄与する」、「学生自らがチームを組み、約1年間でフォーミュラスタイルの小型レーシングカーを開発・製作することによって、学生にものづくりの厳しさ・面白さ・喜びを実感させる」、「競技会では、走行性能だけでなく、車両のマーケティング、企画・設計・製作、コスト等のものづくりにおける総合力を競わせる」ことを、この大会の狙いにしております。

3. 大会発展のための要素

3.1. 自動車技術会

中立的立場である自動車技術会は、この「全日本 学生フォーミュラ大会」を、「次世代の自動車エンジニアの育成」と、「育成のための土壌づくり」であると位置付け、社会貢献事業の一つとして推進することにしました。その結果、産学官の多くからご賛同とご支援を頂くことになりました。というのも、昨今我が国の「理科離れ」、「科学技術離れ」が指摘され、多くの方たちから心配されているといった事情があります。知的創造力が最大の資源である我が国が、21世紀においても「科学技術創造立国」であり続けるためには、若い技術者の育成こそが重要であり、この「全日本学生フォーミュラ大会」は、まさに的を射た企画であったわけです。まずは、自動車技術会はこの精神を貫くことが重要であります。

3.2. 後援・協賛・スポンサーシップ

学生を育成するということは、時間の掛かることであります。一朝一夕にはなりません。昔から、「教育とは、流れる水に文字を書くようなはかない仕事である」と言われています。あまり性急に

成果を期待しては、失敗に終わることになります。「・・・はかない仕事であるが、それを恰も岩壁にのみで刻みつける程の真剣さで取り組まねばならない・・・」ということです。つまり、真剣に取り組むが、成果は急がず、いつか必ず出てくる、それも極めて大きいものであると信じて支援を続けることが大切です。多くのスポンサーは、きっとそういう気持ちのもとで、この大会にご支援されていると思います。

第2回大会においては、後援13・協賛20・スポンサー101といった、大変多くの団体からご支援を頂いております。資金規模の面からいうと、全体で、約4000万円といった大きな事業規模となっています。これを、今後も継続発展させるためには、現在多くの先達や産学官の各方面から頂いている評価・「全日本 学生フォーミュラ大会は、自動車産業発展に資する人材育成に極めて適したプログラムである」・・・を、いつまでも色褪せない状態で継続させなければならないと思っております。

3. 3. 学生

学生が主人公です。

「次世代の技術者育成」、「育成のための土壌づくり」、「社会貢献事業・・・」と言っているうちに、育成する方が主人公になってしまっているようですが、あくまで、学生自身が主人公であって、学生の自発性・自立性を尊重することが大切だと思います。一方、学生も、「学而不思即罔 思而不学即殆」の諺をしっかり認識し、先輩から大いに学び、自ら大いに考えることに努めていただきたいと思います。

3. 4. 今後の展開・国際大会化へ

元々、この「全日本 学生フォーミュラ大会」は、基本的には日本の学生の育成に主眼を置いていますので、国内大会と位置付けてスタートしています。しかし、「世界に通用する次世代のエンジニアの育成」と、「国際化」といった観点から、将来は国際大会へと発展させることを視野に入れております。そこで、まずは今回の第2回大会からは、限定数ですが、海外チームのエントリーを受け入れることにしました。結果として、米・英・韓からの3チームが参戦しました。今後、国際大会運営のノウハウを蓄積し、近い将来オープンな国際大会へと発展させる予定です。

4. 第2回全日本学生フォーミュラ大会の総括

エントリー34チーム、参戦は28チーム、参加者約1530名(チームメンバー約600名、スタッフ約230名、来場者約700名)といった大盛況の下で実施されました。下記は800名以上の人が一同に集合した写真ですが、第2回目にも関わらず、本当に壮大さを感じるものになったと思います。来年の第3回大会(富士スピードウェイ)は40チームを超えると予想しており、ますます大会運営の円滑さが要求されることになると思います。

今年の優勝チームは、米国から参戦されたTexas大・アーリントン校でした。海外から来られ、いろいろと勝手違いの中、苦労も多かったにも関わらず、2位以下を大きく引き離しての見事な優勝でした。まずは、心から祝福したいと思います。

日本勢は、神奈川工科大学(2位)、国土館大学(3位)、芝浦工業大学(4位)、宇都宮大学(5位)、金沢工業大学(6位)、上智大学(7位)、・・・といった順位でありましたが、いずれもすばらしい車の出来栄とチームワークのよい動きでありました。目の前で米国 Texas 大に優勝をさらわれた悔しさをばねにして、来年はまた一段とレベルの高いマシーンを製作することと期待しているところであります。

5. あとがき

この「全日本 学生フォーミュラ大会」は、誕生2年とまだまだ若いものですので、「まずは、安全第一」ということで、大会の運営に努めてきました。第1回から今回の第2回大会の実行委員長を務めた大須賀和男氏(トヨタ自動車)はじめ、幹部スタッフの細大漏らさずの気配りにただただ感謝したいと思います。

また、忙しい中にも関わらず、多くのスタッフを派遣して頂いた企業・大学の好意と、酷暑・悪天候の中で献身的なボランティア活動をやられた230名ものスタッフに、心からなる謝意を表したいと思います。

第2回大会からは、文部科学省からの祝詞を頂いたことと、経済産業大臣賞を設けて頂きました。これは、学生チームにとっても、大会を運営する私どもにとっても、大きな励みとなりました。今後も、この大会がより多くの皆様にご理解され、より多くのご賛同・ご支援を頂けるように努めて参りたいと思います。

最後に、主人公である学生諸君に一言。

- ・・・・「将来、自動車工学分野で活躍したい者は、この全日本 学生フォーミュラ大会に参加すべし！」・・・

